

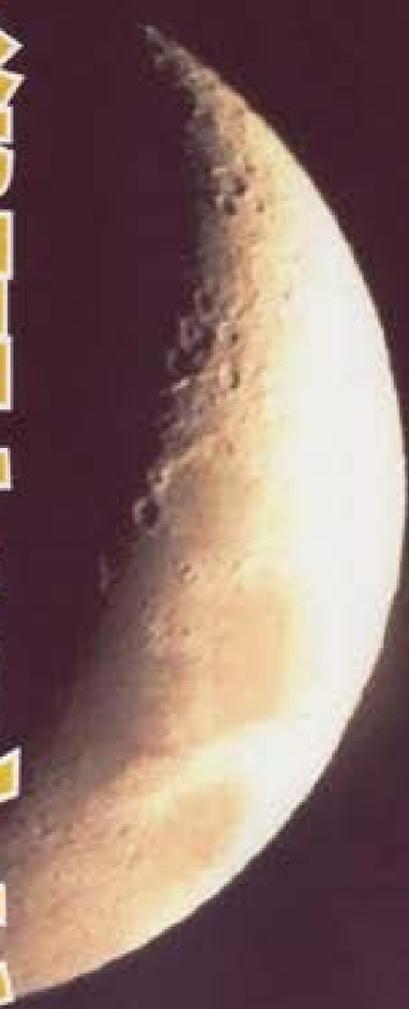


エミシとヤマトの境界に

何があったのか

# 発掘された 奥州市展 2015

胆沢城前夜と最新の発掘成果



## 奥州市牛の博物館

6月5日(FRI)～6月21日(SUN)

会場/全洲展示室 時間/9:30～17:00 毎週月曜休館  
入館料/一般400円(300円)、高校生300円(200円)、小・中学生200円(100円)  
( )内は20名以上の団体料金  
未就学児童および奥州市内に在住する満70歳以上の方は無料  
土曜日は奥州市内の小・中・高校生は入館料免除  
奥州市前沢区南陣場 103-1 ☎0197(56)7666

## 奥州市埋蔵文化財調査センター

6月26日(FRI)～7月6日(MON)

会場/ロビー特設会場 時間/9:00～16:30 毎週火曜休館  
入館料/一般200円(100円)、高校生以下無料 ※ロビーは入館無料  
( )内は15名以上の団体料金  
6月27日(土)・28日(日)は無料入館日  
奥州市水沢区佐倉河字九蔵田 96-1 ☎0197(22)4400

## えさし郷土文化館

7月10日(FRI)～7月22日(WED)

会場/第二展示室 時間/9:00～17:00 年中無休  
入館料/一般300円(200円)、高校生200円(150円)、小・中学生150円(100円)  
( )内は15名以上の団体料金  
未就学児童は無料 奥州市民は入館料半額  
奥州市江刺区岩谷堂字小名丸 102-1 ☎0197(31)1600

## 胆沢郷土資料館

7月24日(FRI)～8月23日(SUN)

会場/全洲展示室 時間/9:00～17:00 毎週月曜休館  
入館料/一般200円(100円)、高・大学生100円(50円)、小・中学生50円(30円)  
( )内は15名以上の団体料金  
未就学児童は無料  
奥州市胆沢区南部田字加賀谷地 1-1 ☎0197(46)2133



銅器(8世紀・江刺区 愛宕原川遺跡)



土製丸玉/土製短玉(7世紀・水沢区 猪毛遺跡)



陶器土器(8世紀・胆沢区 二本木遺跡)

### 主な展示品

奥州市内 奈良時代出土資料  
平成26年度奥州市内発掘調査出土資料  
(水沢区北郷ノ木遺跡・江刺区大日蓮遺跡・前沢区白鳥原遺跡・水沢区胆沢城跡・水沢区猪毛川前遺跡)

主催 奥州市教育委員会

お問合せ 奥州市教育委員会事務局歴史遺産課  
TEL 0197(35)2111 内線442  
FAX 0197(35)7551  
E-Mail rekis@city.ozu.lwate.jp  
〒023-1192 奥州市江刺区大通り1-9

# ごあいさつ

現在奥州市内には、1000 を超える遺跡が確認されています。これらの遺跡は、調査発掘や開発に伴う緊急発掘により調査が行われています。

こうした発掘の成果は、現地説明会や報告会で公開されるほか、調査報告書としてまとめられていますが、出土遺物を間近に観覧できる機会は限られていました。

そこで、昨年度調査された市内遺跡の発掘調査成果とあわせ、アテルイやモレに代表される「エミシ」と呼ばれた人たちが活躍した奈良時代を特徴付ける遺跡を紹介し、皆様に埋蔵文化財に対し興味を持っていただこうと、この展示会を企画いたしました。

奥州市牛の博物館、奥州市埋蔵文化財調査センター及びえさし郷土文化館、胆沢郷土資料館での巡回展示を通して、多くの方々に地域の歴史をご覧いただければ幸いです。

平成 27 年 6 月

奥州市教育委員会

教育長 **田面木 茂樹**

# 胆沢城前夜

今回の巡回展は、教科書で飛鳥時代（7世紀）、奈良時代（8世紀）と紹介されている時代をテーマとしました。

仏教が伝来し、聖徳太子の活躍や大化改新を経て、律令（刑法と行政法）に基づく、天皇を中心とした政治体制へと変化する時代です。

しかし、このような畿内を中心とした文化や政治体制が日本列島の隅々まで広がるには、多少の時間を要し、律令制の及ばない地域では、地域ごとに独自の文化が育まれていました。奥州市域の人々は、古墳時代から変わらない生活を営んでいましたが、国家の領土拡大政策により、坂上田村麻呂さかのうえたむらによる東北征討が行われ、律令体制に組み込まれていきます。

大きな転換期となった胆沢城造営（802年）までのこの時期を、「胆沢城前夜」と名付け、古墳時代の終わりから平安時代の初めの奥州市の様子を紹介します。

## 「エミシ」の研究

エミシの研究は、正史である『日本書紀』や『続日本紀』といった古代の文献を史料とする方法が主流でした。1970年代に入ると、東北新幹線や高速道路整備に伴う発掘調査が進んだことを受け、出土遺物などの分析から研究を行う、考古学的な方法も取り入れられるようになりました。

また、田村麻呂たむらまろや悪路王あくろおう伝説などの分析を通じて研究を行う、民俗学的方法も注目されています。

戦前、エミシはアイヌであるという説（エミシアイヌ説）が優勢でした。日本列島の先住民である縄文人が古代エミシとなり、やがて近世アイヌになったというものです。戦後になると、古代エミシは人種的には倭人と同じで、国家に従わない人々であったために野蛮視されただけ、というエミシ非アイヌ説が唱えられます。

現在古代エミシは、当時の倭人と共通する面と、のちのアイヌに連なる面とを合わせ持つ存在であると考えられる説が有力です。

# 歴史書に登場する「エミシ」

『日本書紀』などの正史には、「愛瀨誌<sup>えみし</sup>」、「毛人<sup>えみし</sup>」、「蝦夷<sup>えみし</sup>」という表記が見えます。

その中で彼らは、農耕を知らず、山野に起居し、争いばかりして国家のいうことに従わない、野蛮な人々という描かれ方をしています。

また、「毛人」という漢字には、毛深い人々という意味を、また、「蝦夷」という漢字には、蝦<sup>えび</sup>のように髭<sup>ひげ</sup>が長いという意味を示そうとしたと考えられています。

「エミシ」は、野蛮で多毛の外見を備えた人々として、国家から差別されていたことがうかがえます。

## エミシの衣食住

発掘調査の進展によって、文献からは知りえない、この時代の人々の暮らしぶりがわかってきました。

その暮らしは、『日本書紀』に描かれたような、毛皮を着ているとか、農耕を知らないというものではありませんでした。

住居跡から糸紡ぎの道具である紡錘車<sup>ほうすいしゃ</sup>が出土します。繊維製品は残らないので、残念ながらどのような衣服を身に着けていたかはわかりませんが、糸を紡ぎ、布を作っていた可能性があります。

江刺区<sup>おだき</sup>愛宕の後中野遺跡からは、奈良時代の畑の跡が見つっています。土の分析をしたところ、イネやオオムギに含まれる植物珪酸体<sup>しょくぶつけいさんたい</sup>が見つかり、農耕をしていたことがわかりました。

発掘調査で見つかる竪穴住居跡には、カマドがつくりつけられ、土器を使って煮炊きをしていたことがわかります。

出土した資料から見える彼らの暮らしぶりは、東北南部や西日本の人たちと、さほど変わらないものでした。

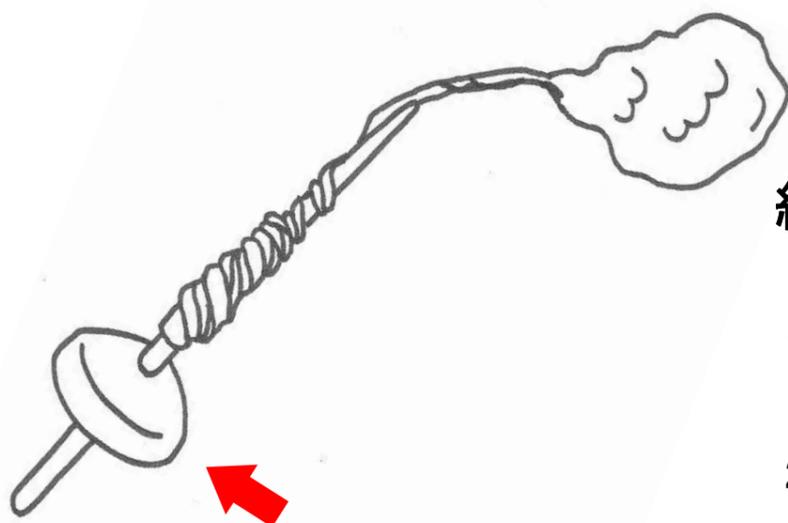
衣



### 石製紡錘車（上）と土製紡錘車（下）

繊維に適当な強さを与え、太さをそろえるために撚りをかけて糸にし、これを巻き取る道具のことを紡錘、紡輪といますが、糸を巻き取る際に軸の回転に惰性を与えるはずみ車のことを紡錘車といます。直径4～5cm程度の扁平な円形の中央部分には、軸を通すための穴があります。

弥生時代になって広く普及し、奈良時代以降、鉄製で軸と一体化したものも普及します。



### 紡錘車の使い方

- 1 紡錘車の回転で撚りをかける
- 2 紡錘車の孔に通した糸巻き棒に糸を巻きつける

食

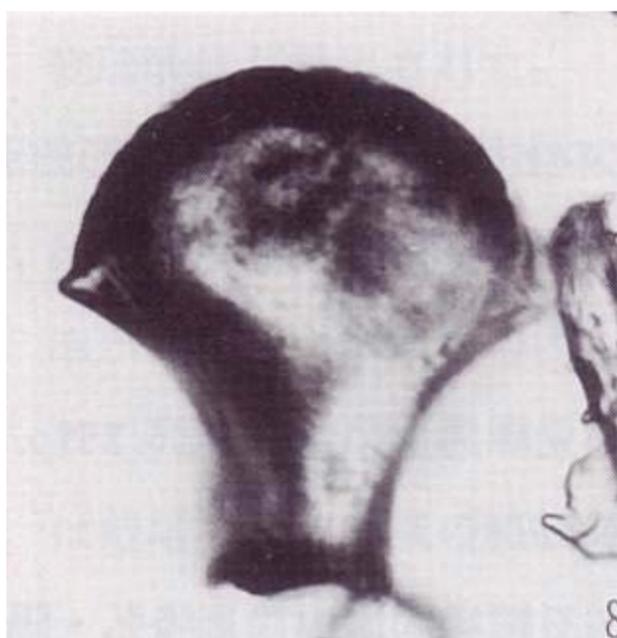


うしろなかの

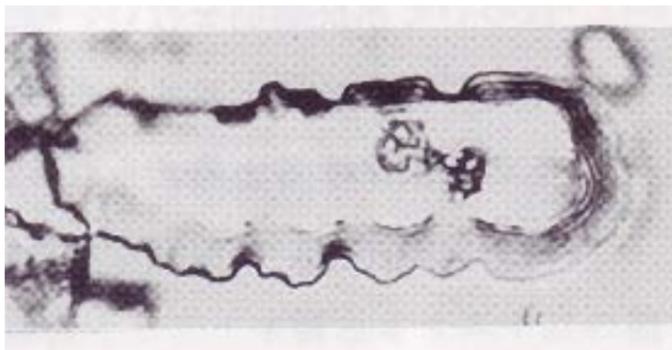
### 後中野遺跡から見つかった畑跡

おだき

遺跡は、江刺区愛宕字後中野地内に所在します。沖積台地の微高地上に立地し、周辺にはこの微高地にのるように小集落が形成されています。発掘調査で奈良時代の畑跡が見つかり、畑跡の土壌分析の結果、イネ属とオオムギ属の植物珪酸体が高い値で見つかり、陸稲栽培の可能性が示唆されています。



イネ属の植物珪酸体



オオムギ属の植物珪酸体

しょくぶつけいさんたい

植物珪酸体(プラントオパール)とは、植物の細胞内に、ガラスの主成分である珪酸 (SiO<sub>2</sub>) が蓄積したものです。植物が枯れた後も微化石(プラントオパール)となって土壤中に半永久的に残ることから、これを分析することによって、過去の植生を復元することができます。

プラントオパールは、イネ科の植物に多く含まれるため、稲作の有無を調べる際に用いられます。

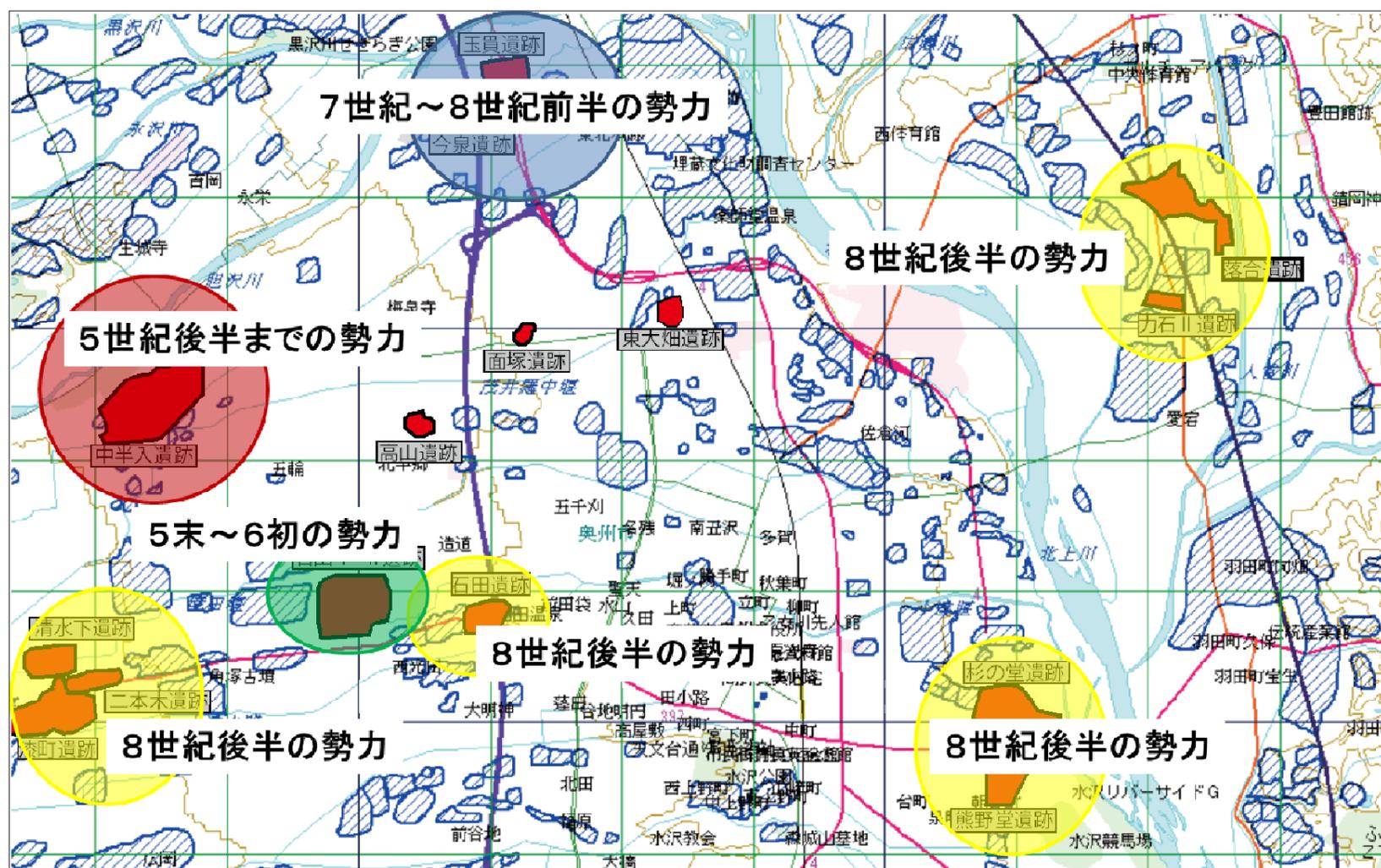
# 住



たてあなじゅうきょ みずさわくじりょう  
**竪穴住居（水沢区寺領遺跡）**

住居の隅が丸い隅丸方形の形をしています。床面は土間で、屋根を支える主柱が掘られています。住居内の壁際にはカマドがつくりつけられ、煙突にあたる煙道は屋外に延びています。東北地方の煙道は、関東や西日本と比べ長いのが特徴ですが、基本的な住居の作りは変わりません。

写真提供：一財）奥州市埋蔵文化財調査センター



## 古代集落の変遷

資料提供：佐藤良和氏

5世紀後半から6世紀初めまでは、中半入遺跡（水沢区）や沢田遺跡（胆沢区）などの胆沢扇状地の低位段丘を中心に集落が営まれます。その後、集落は極端に減少しますが、その理由はわかっていません。7世紀になると、今泉遺跡や膳性遺跡（水沢区）などの胆沢川南岸に集落の中心が移ります。8世紀後半になると、集落は各地に分散する傾向が見られます。

# エミシの土器

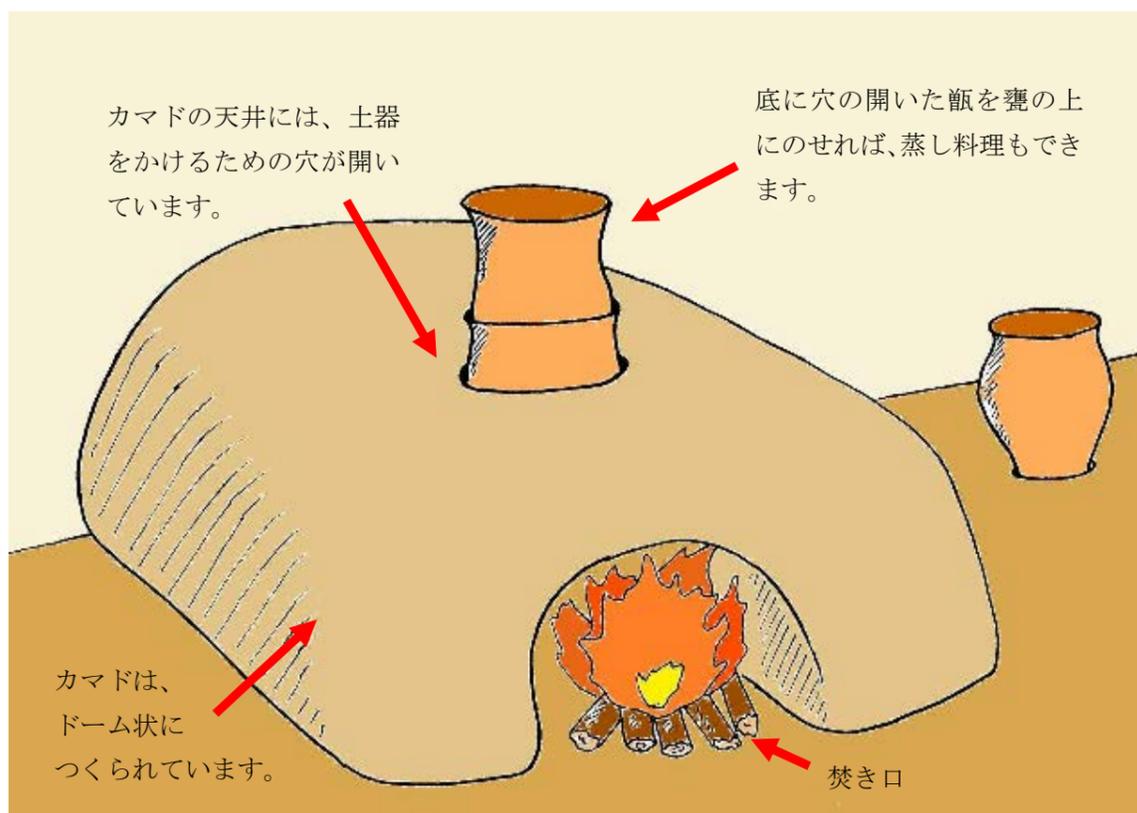
煮炊き用の長胴甕ちょうどうがめ（現在の鍋や釜）、貯蔵用の球胴甕きゅうどうがめ、小型の甕こしき（蒸し器）、坏つきなどがこの時期の一般的な土器の種類になります。

土器の作り方などには地域ごとに特徴がありますが、使っていた土器の種類は、西日本の人たちと同じでした。



## 長胴甕

何を調理したかはわかりませんが、土器の内外面についた煤や焦げのあとから、煮炊きに使用された土器ということがわかります。



## 古代のカマド

住居の中につくりつけられたカマドです。煙を外に出す煙道が住居の外につながっています。

# エミシの交流

奥州市付近は、古墳時代から北と南（西日本）の物流の拠点であり、両方の文化が入り混じる境界でもありました。

集落からは、北の続縄文文化の影響を受けたと考えられる文様のついた土師器や黒曜石製の石器が見つかります。

また、律令国家と交流が無ければ手に入らないものも出土しています。代表的なものは、和同開珎わどうかいちんや銚帯金具かたいかなぐ、直刀ちよくとうといった鉄製品などです。エミシの族長たちの中には、律令国家と積極的に交流し、友好関係を築いた人たちもいたようです。



わ どうかいちん  
**和同開珎**（花巻市熊堂古墳群出土）

708年（和銅元年）、律令政府が公式に発行した銅銭で、「本朝（皇朝）十二銭」のひとつです。『続日本紀』には、708年に鑄銭司が置かれ、5月に銀銭しよくにほんぎ、8月に銅銭が発行されたことが記されています。出土例が一番多いのは近畿地方ですが、九州や東北、中国西安の唐長安城跡からも出土しています。

写真提供：花巻市総合文化財センター



か たいかなぐ  
**銚帯金具**（花巻市熊堂古墳群出土）

革帯かたい（銚帯）に取り付けられた金属製の装飾板のことで、ベルトのバックルに当たる鉸具かこ、四角い形の巡方じゅんぼう、半円形の丸軛まるとも、帯尻の鉈尾だびからなります。

奈良時代の律令制度導入により、貴人・官人が腰帯として着用したもので、身分階層を表現するものでもありました。

写真提供：花巻市総合文化財センター



わらび てとう  
**蕨手刀**（花巻市熊堂古墳群出土）

柄頭つかがしらの形が蕨わらびに似ているので、この名前がついています。7世紀後半に群馬・長野県地方に出現し、8～9世紀に東北地方に伝わったとされます。

蕨手刀は、東北北部で柄、刀身に反りが加わって「突く」刀から「斬る」刀へと機能的な変化が起こったと考えられていて、日本刀の原型になったともいわれています。

写真提供：花巻市総合文化財センター

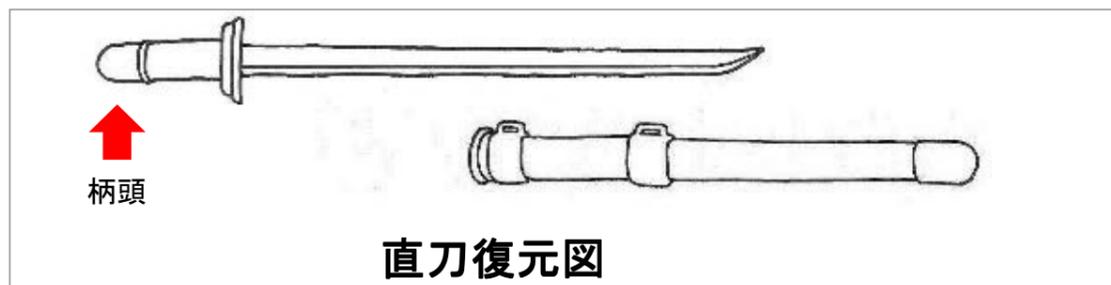


けいとう た ち つかがしら みずさわくぜんしょう  
**圭頭太刀柄頭** (水沢区膳性遺跡出土)

柄頭の形が中国の玉器の圭けいに似ているところから、名前がつけられました。

聖徳太子が着用している太刀の柄頭と同じもので、柄頭の先端が山形になっているところが特徴です。

律令国家との交流を推定させる資料です。



かんとうけい ど き

**関東系土器** (左)



あんもん ど き

**暗文土器** (右)

いさわくにほんぎいせき

(胆沢区二本木遺跡出土)

ともに7世紀末～8世紀初頭ごろの須恵器すえき (左) と土師器はじき (右) の坏型土器です。関東系土器は、器の形が埼玉県など関東地方の遺跡から出土する土器に似ていることから、こう呼ばれています。福島県や宮城県みやぎの遺跡からも出土する資料にも類似のものがあり、これらの地域との関連もうかがえます。一方、暗文土器は、畿内きんや関東地方の土器に多くみられる「暗文」と呼ばれる、放射状または渦巻き状に土器を磨いた跡をまねたと考えられる線刻が、土器の内側に施されています。畿内または関東地方との交流を物語る土器です。



**様々な玉** (花巻市熊堂古墳群出土)



**土で作った勾玉 (上) と丸玉 (下)**

(水沢区膳性遺跡出土)

写真提供：花巻市総合文化財センター

# エミシの墓～末期古墳～

まつきこふん  
「末期古墳」とは、7世紀から8世紀の東北地方北部に特徴的なお墓で、土を盛って造られています。

律令国家内では古墳がほとんど造られなくなる8世紀に入っても、岩手県内では、集落の急増に伴って、末期古墳が各地に造られることから、「エミシの墓」と呼ばれることもあります。

直径5～10mほどの小円墳で、地面を掘りくぼめて主体部（埋葬部）を作ってから墳丘を築いています。主体部には、地面を掘りくぼめただけのものや、掘りくぼめた地面に小礫や木炭を敷いたもの、川原石を積んで石室せきかく（石槨）を作るものなど作り方にいくつかのタイプがあります。古墳からは、和同開珎や銚帯金具、刀剣類、馬具といった畿内政権との交流からもたらされた副葬品に交じって、北海道の文化である続縄文文化の影響を受けたと考えられる土器や、黒曜石製の石器が出土します。

このようなことから、末期古墳は、古墳文化と続縄文文化を融合させた、この地域独自の埋葬方法と考えられます。



くまどう

## 熊堂古墳群A－4号墳石室（花巻市指定史跡）

川原石を積んで、埋葬部となる石室（石槨）を作っています。

熊堂古墳群は、花巻市上根子字熊堂に所在し、豊沢川北岸の標高約95mの沖積段丘上に立地しています。熊野神社境内を中心に、段丘の地形に沿って、東西約1.2km、南北約0.4kmの範囲に約50基ほどの古墳が分布しています。

このうち16基が発掘調査され、南南東に開く馬蹄形の周溝がめぐり、川原石積みの埋葬部を持つことなどがわかっています。副葬品には銅銭や銚帯金具、鉄刀類、勾玉、切子玉といった多量の玉類など、豊富な出土品がみられます。

写真提供：花巻市総合文化財センター



どこうぼ

## 奈良時代の土器墓（江刺区愛宕梁川遺跡）

おだきやながわ

8世紀後半のお墓の上から高坏や甕、坏などの土器が見つかりました。高坏は伏せた状態で、坏は上向きで置かれていました。甕は、底に穴が開けられていました。このような穴を開ける行為は、埋葬など特別な用途に用いるときに行われます。これまでの葬制とは異なるしきたりが垣間見えます。

写真提供：えさし郷土文化館

# エミシ争乱(アテルイ・モレの登場)

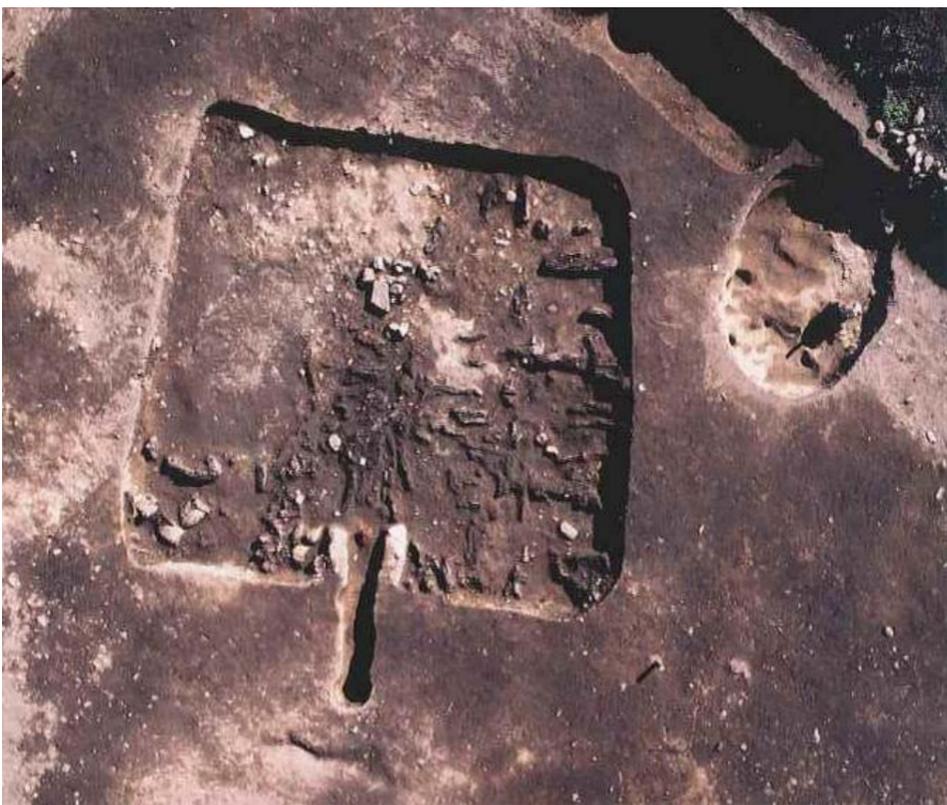
東北地方を支配下に置こうとする律令国家は、城柵じょうさくという、国家の行政施設をつくり、関東などから大勢の移民を城柵の周辺に住まわせました。このような行為は、エミシたちの危機感を募らせ、抵抗の誘因となりました。

宝亀5年(774)、海道(北上川下流域)に住んでいたエミシが、桃生城(宮城県石巻市)を攻撃します。弘仁2年(811)まで続く、東北の争乱(38年戦争)の始まりです。

この争乱の中で登場したのが、アテルイやモレです。エミシ集団の族長だった二人は、2度にわたり律令国家の大軍を退けますが、延暦21年(802)胆沢城造営を機に、ついに降伏を決意します。

その後の二人の運命は、みなさんご存じのとおりです。

律令国家はその後にも北進を続け、志波城(803年)、徳丹城(811年)を築き、東北地方は律令体制に組み込まれていきます。



## 火事跡が残る竪穴住居

みずさわくすぎ どう  
(水沢区杉の堂遺跡)

杉の堂遺跡(佐倉河)や熊ノ堂遺跡(真城)からは、奈良時代末ごろ(8世紀後半)の、火災で焼けた住居跡が多く見つかっています。

火災の原因は様々考えられますが、この時期、律令政府との争いが本格化し、北上川一帯も主戦場となります。争乱の記憶をとどめた住居なのかもしれません。

写真提供：一財)奥州市埋蔵文化財調査財センター

## アテルイ(?~802)

奈良時代末~平安時代初期、律令政府とエミシとの戦争においてエミシ軍の総帥として戦った、陸奥国胆沢地方のエミシ族長。大墓公たものきみの姓を持ち、「阿弋利為」ともいいます。

阿弋流為の名前は、政府軍との戦い(巢伏の戦い)を記した『続日本紀』延暦8年と、阿弋流為と母礼の投降を記した『日本紀略』延暦21年の項に登場するのみで、詳細な人物像は伝わっていません。

## 母礼(?~802)

盤具公ばんぐのきみ(「いわぐのきみ」とも)の姓を持つ、阿弋流為とともに政府軍と戦った胆沢地方のエミシの族長。阿弋流為と同様、詳細な人物像は伝わっていません。

# 「エミシ」とは

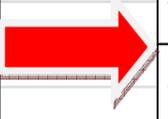
古代、日本列島の北縁には「エミシ」と呼ばれた人々が住んでいました。彼らは、国家から未開で野蛮な集団というレッテルを貼られ、差別と支配の対象でした。

しかし、彼らは西日本の人々と同じように、畑を耕し穀物をそだて、家族を慈しみ、様々な地域の人たちと交流を持ちながら暮らしていました。なかには、律令国家と積極的に交流を持っていた人々もいたようです。和同開珎や銚帯金具、直刀などの鉄製品の出土が、そのことを物語っています。

一方で、北方の続縄文文化特有の土壙墓や黒曜石製の石器などがみられることから、縄文時代以来の伝統的な生活様式も維持していたことをうかがわせます。

西日本の文化と北方文化の接点に居住し、両方の社会と交流しながら独自の社会、文化を育んでいた人々というのが、「エミシ」の実態でした。

年代	時期区分		主な事柄	奥州市内の主な遺跡	県内の主な遺跡	日本の主な遺跡
	本州	北海道				
B. C. 13000	旧石器時代	旧石器時代	大型動物が生息する		遠野市宮守町金取遺跡	
			気候が温暖になる 土器の使用が始まる	(胆)上萩森遺跡、二の台長根遺跡、岩洞堤遺跡、下嵐江 I・II 遺跡	西和賀町大台野遺跡	北海道白滝遺跡群 群馬県岩宿遺跡
	縄文時代	縄文時代	草創期			青森県大平山元遺跡
			早期	(胆)休場遺跡、浅野遺跡 (水)駆上遺跡	盛岡市大新町遺跡	
4000	縄文時代	縄文時代	大規模なムラができる 漆の本格的な利用が始まる	(胆)大清水上遺跡	遠野市綾織新田遺跡	
			中期		紫波町西田遺跡 一戸町御所野遺跡	青森県三内丸山遺跡 長野県尖石遺跡
2000	縄文時代	縄文時代	後期	(江)久田遺跡		秋田県大湯環状列石 東京都大森貝塚
			晩期	亀ヶ岡文化が広がる	(水)杉の堂遺跡 (衣)東裏遺跡	北上市九年橋遺跡 大船渡市大洞貝塚
A. D. 300	弥生時代	続縄文時代	稲作が始まり、金属器が使用される			
			卑弥呼が邪馬台国王となる	(胆)清水下遺跡 (水)常磐広町遺跡 (江)兔 II 遺跡、反町遺跡	一関市谷起島遺跡 滝沢市湯舟沢遺跡	青森県垂柳遺跡 佐賀県吉野ヶ里遺跡 静岡県登呂遺跡
	古墳時代	続縄文時代	大和朝廷が国家統一を進める 古墳が各地につくられる	(水)高山遺跡	盛岡市永福寺山遺跡	福島県会津大塚山古墳
				(水)中半入遺跡、面塚遺跡 (胆)角塚古墳、石田 I・II 遺跡、沢田遺跡	北上市猫谷地遺跡 花巻市熊堂古墳	大阪府仁徳天皇陵(大山)古墳
600	飛鳥時代	オホーツク文化期	聖徳太子が摂政となる 大化改新がおこる	(水)膳性遺跡	宮古市長根 I 遺跡	
800	奈良時代	続縄文時代	奈良に都がつくられる	(水)寺領遺跡、(江)愛宕梁川遺跡		奈良県平城京跡 宮城県多賀城跡
			京都に都がつくられる 胆沢城や志波城がつくられる 各地に荘園が広がる	(胆)小十字遺跡、二本木遺跡 (水)胆沢城跡	盛岡市志波城跡 矢巾町徳丹城跡	
1000	平安時代	擦文文化期	(前)道上遺跡、明後沢遺跡 (江)瀬谷子窯跡			
			前九年・後三年の役がおこる 平泉藤原氏滅亡する	(江)豊田館跡 (前)白鳥館遺跡 (衣)長者ヶ原廃寺跡、接待館遺跡	金ヶ崎町鳥海柵跡 平泉町柳之御所遺跡 一関市骨寺村荘園遺跡	秋田県大鳥井山遺跡
1200	鎌倉時代	中世	鎌倉幕府ができる	(江)落合 III 遺跡	盛岡市繫 III 遺跡	青森県十三湊遺跡
			文永・弘安の役おこる 室町幕府ができる		花巻市笹間館跡 一戸町一戸城跡	
1400	室町時代	中世	応仁の乱	(水)正法寺創建 (水)十日市屋敷(環濠屋敷跡)	紫波町柳田館跡	
			秀吉全国統一する		久慈市久慈城跡 遠野市篠館跡	福井県一乗谷朝倉氏遺跡 滋賀県安土城跡
1600	安土桃山時代	近世	江戸幕府ができる	(水)水沢城(水沢要害) (江)岩谷堂城		
			鎖国が始まる	(水)高野長英旧宅	北上市・金ヶ崎町南部領伊達領境塚	
1900	近・現代	近世	開国が行われる 明治維新		釜石市橋野高炉跡	北海道五稜郭跡



※太文字は、国指定史跡

**-平成 26 年度発掘調査速報-**

# 北鶺ノ木遺跡の発掘調査

調査地 奥州市水沢区羽田町字北鶺ノ木地内  
調査面積 937 平方メートル  
調査期間 平成 26 年 7 月 2 日～同年 11 月 21 日  
調査機関 (一財)奥州市文化振興財団 奥州市埋蔵文化財調査センター

## 北鶺ノ木遺跡の概要

北鶺ノ木遺跡は北上川東部に位置します。東北新幹線水沢江刺駅の南南西へ 1.3 km、奥州市総合体育館から西へ 0.7 kmほどのところですが。北上山地西縁部の開析が進んだ丘陵性山地の末端に立地します。遺跡が立地する段丘は北側と西側を小田代川によって区切られています。

1984 (昭和 59) 年には確認調査が実施され、土師器や須恵器が出土した土坑跡や井戸跡が見つっています。2002・2003 (平成 14・15) 年には平安時代の粘土採掘坑が見つっています。平成 13 年度にも調査が実施され、縄文時代の土坑跡が見つっています。



北鶺ノ木遺跡第 4 次調査全景写真

## 見つかった遺構と遺物

竪穴建物跡、土塁跡、溝跡、土坑跡が見つかりました。今回は竪穴建物跡と土塁跡について紹介します。

### ●竪穴建物跡

5 棟見つっています。特徴としては土塁の内側に土坑群が見つっているのですが、土坑群と並行して竪穴建物跡が作られることです (SI1~3、5 竪穴建物跡)。また下記のような類似性がみられます。

- ① 穴建物跡の壁四辺に沿って壁溝が掘られる。
- ② 竪穴建物跡の内部から外部 (土坑群) へ向かって排水溝状の小溝が作られる。

以上のことから、見つかった竪穴建物跡はほぼ同時期に存在しているものと推測します。

竪穴建物跡からは土師器や須恵器が出土しています。土師器、須恵器を問わず『蓋』が多く出土していることが特徴です。

また、建物内部に棚状の施設を持つ竪穴建物跡も見つっています。この竪穴建物跡は新旧 2 つの時期があります。新しい竪穴建物跡が古い竪穴建物跡を壊して、かつ古い竪穴建物跡よりも深く掘り込みます。そして古い竪穴建物跡の床面を棚状の施設として使用しているようです。このことは棚状施設の埋め土と同じ土が新しい竪穴建物跡の中にまで堆積することから判断しました。棚状施設には古い竪穴建物跡で使用していたかまどが撤去されないまま残っていました。

竪穴建物跡の時期は出土遺物から胆沢城が創建された時期頃と推測します。



棚状施設を持つ竪穴建物跡



排水溝を持つ竪穴建物跡

## ●土塁跡

土塁とは土を積み上げて作った連続する小山状の壁のことです。築地塀も土を積み上げて作りますが、積み上げたごごにつき固めて作り上げます（版築技法）土塁と築地塀の違いはここにあります。

北鶉ノ木遺跡の土塁跡は古くからその存在が知られています。今回の調査では遺跡の北側に位置する土塁跡を長さ約25mにわたって調査しました。

土塁跡ははじめに地山面を削り出して底辺が4.8～5.6mほどの断面が台形状の基底部を作ります。土塁基底部の内外には細い小溝状の掘り込みが観察できます。土塁の内側、外側から土取りをして土塁を積み上げていきます。土塁の内側の土取り穴は溝状にすべて連なります。土塁の外側は土塁の内側の土取り穴と比べて浅く、高低差はあるものの比較的フラットな面となります。土塁の高さは外側で1.7～2.2m、内側で1.5～1.7mほどの高さがあります。



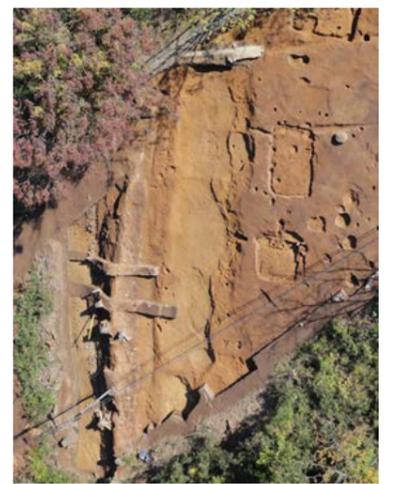
土塁跡（北東から）



土塁跡（南東から）

## ●土取り土坑跡

土塁に並行する連続した土坑跡を検出しました。規模が大きく土塁と並行することから土塁を盛るために掘削した土取り土坑跡と判断しました。もっとも大きい土取り土坑跡は長軸7.4m、短軸6.2m、深さ0.6～0.7mほどを計測します。最も小さい土取り土坑跡で長軸8.5m、短軸4.5m、深さ0.4～0.5mほどを計測します。土取り土坑跡の底面はほぼフラットですが、地形が西側に傾斜しているせいか、土取り土坑跡底面も西側に傾斜しています。土坑跡は1つの作業区を意味しているのかもしれませんが、土坑跡が連続することは溝を意識しているのでしょうか、溝を作れない何らかの理由があったと考えます。



土取り土坑跡

## 竪穴建物跡、土塁の時期

竪穴建物跡は出土遺物から9世紀初頭、胆沢城創建期ごろを想定しています。土塁の時期は出土遺物が少ないことから時期を判定することが難しい状況となっています。そこで、土塁を盛るために掘削したであろう土取り土坑跡から時期を考えてみます。

竪穴建物跡の排水溝状の小溝が土取り土坑跡に向かって伸びます。この小溝は土取り土坑跡が30cmほど埋まった後に埋まります。つまり、土取り土坑跡は竪穴建物跡が埋まる前には存在していたことがわかります。このことを裏付けるかのように小溝の埋土下面の土取り土坑跡埋土上には竪穴建物跡から出土する遺物と同時期の遺物が多数出土しています。竪穴建物跡と土取り土坑跡の相対的な時期関係はわかりましたが、土取り土坑跡がいつ掘られたのかははっきりしません。出土遺物は最も古いもので縄文土器ですが、小片がごく少量出土するだけです。新しい遺物は9世紀初頭の遺物です。



排水溝状の溝跡



土取り土坑跡遺物出土状況

このことから竪穴建物跡と土取り土坑跡は、ほぼ同時期に存在していたと考えます。したがって、土取り土坑跡から採掘した土を盛った土塁も竪穴建物跡と同時期と考えます。

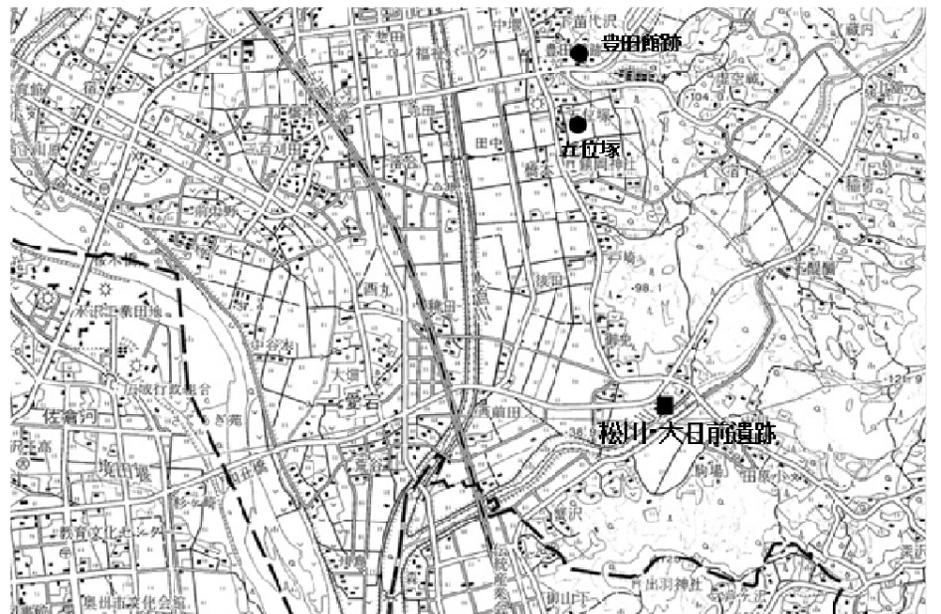
## まとめ

今回の調査で北鶉ノ木遺跡は9世紀初頭、胆沢城創建期頃の集落跡であることがわかりました。しかも、普通の集落ではなく周囲に土塁をめぐらす特殊な集落のようです。竪穴建物跡の内部には壁溝とは別に小溝が掘られ、竪穴建物跡の外へのびる排水溝のような構造がみられます。排水溝のような施設を持つ竪穴建物跡は一般的に「工房跡」と考えられますが、何かを作ったような痕跡は確認できませんでした。過去の調査で、粘土採掘坑跡が見つかったこと、聞き取りではありますが窯跡のようなものが周囲で発見されていることから、土器製作に関係した人々の集落であるかもしれません。

北鶉ノ木遺跡の発掘調査の成果は土塁の時期が推測できたことです。胆沢城が造営されたところに土塁を備えた集落が存在することは何を物語っているのでしょうか。土塁は現在でも一部残っていますし、過去の記録によると北鶉ノ木西遺跡、北鶉ノ木方八町遺跡、北鶉ノ木東遺跡にまでめぐるとの記録があります。全容を知る上では今回の調査はほんの一部にすぎませんが、究明していかなければなりません。

# 大日前遺跡の発掘調査

調査地 奥州市江刺区田原字大日前地内  
 調査面積 6,203 平方メートル  
 調査期間 平成 26 年 5 月 7 日～同年 12 月 27 日  
 調査機関 (一財)奥州市文化振興財団 奥州市埋蔵文化財調査センター



## 遺跡の立地と環境

遺跡は、JR 水沢駅から北東へ約 5 km に位置し、北上川左岸の伊手川と人首川に挟まれた低位段丘上に立地します。遺跡の周辺には、中世末期の大日如来が安置される大日堂(皇大神社)、松川遺跡(昭和 62 年度県埋蔵文化財センターの発掘調査。9 世紀の掘立柱建物跡を検出)、石山遺跡(平成 24 年度県埋蔵文化財センターの発掘調査)があります。また、遺跡から北へ 2.5 km には、豊田館跡が所在します。

## 発掘調査の概要

発掘調査で見つかった遺構								
遺構名	柱穴列跡 SA	掘立柱建物跡 SB	溝跡 SD	土坑跡 SK	方形周溝 SX	河道跡 SX	ピット P	その他 SX
検出数	2	4	15	40	5	5	500 以上	5

発掘調査で見つかった主な遺物	
縄文時代	石器(石鏃)、縄文土器
9 世紀後半～10 世紀初	土師器(坏・高台坏・甕)、須恵器(坏・甕)、須恵系土器(坏)
12 世紀	土器(かわらけ・柱状高台)、国産陶器(渥美焼・常滑焼)、貿易陶磁(白磁・青磁・青白磁)、木製品
16～17 世紀	瀬戸美濃産陶器、金属製筭

## ASB01 掘立柱建物跡

建物跡は、身舎の梁行 1 間(4.3m)×桁行 5 間(10.5m)以上、廂を含むと、南北 7.1m×東西 12.2m 以上で、廂は 3 面以上付属すると考えられます。柱の掘り方や、遺物の出土状況から 9 世紀代の建物跡と考えられます。しかし、廂の出が非常に狭いことや、梁行 1 間の建物であることから、今後検討が必要となります。



## BSX02 河道跡

伊手川に向かって北東から南西へ蛇行しながら流れます。河幅は約 10m 以上で、場所によっては 40m を測る場所もあります。

河道跡からは 9・12 世紀の遺物が出土しています。遺物の出土傾向から廃棄あるいは流れ込んだものと考えられます。



## BSX02 河道跡の出土遺物

12 世紀代のかわらけ(ロクロ・手づくね)、柱状高台、貿易陶磁(白磁・青磁・青白磁)、国産陶器(渥美焼・常滑焼)が出土しています。





### 方形周溝群

大日堂の南側から、同じような形状の方形に区画された溝跡が5基見つかりました。

遺物が出土していないことから、この遺構がどんな性格を持ち、いつの時代であるかは今後検討が必要です。



### DSD02溝跡

方形周溝群の東側から見つかりました。溝跡はやや丸底状で深さ1.5~2mを測ります。溝跡内からは、一段低くなった落ち込み見つかりました。また、この落ち込みは、堆積状況から後から掘られたものではないこともわかりました。埋土中からは、12世紀後半のかわらけや、木製品が出土しています。



### DSD02溝跡から出土したかわらけ

ロクロと手づくねが見られます。器種は小皿と大皿があります。

主に宴会・儀礼などで使用されます。



### DSD08溝跡

大日堂の西側から見つかりました。平面形は、北から南に走り、途中で東へL字状に屈曲します。埋土中からは、9世紀代の土師器小破片が見つかりましたが、流れ込んだ遺物と考えられます。

また、推察ですが、大日堂を区画することも考えられます。



### 柱穴群

大日堂の東側一帯に多数検出されています。柱穴の形状は円形、隅丸方形などがみられます。現在調査中ですが、総柱建物が1棟確認されています。

また、これらの検出された地表からは、9世紀後半~10世紀初頭の土師器、須恵系土器が出土しています。

## まとめ

発掘調査では、調査区内において大規模な河道跡を検出し、その埋土中から9・12世紀の遺物が大量に出土しました。その性格は、県道玉里水沢線を境に南側からは、平安時代の遺物が大量に出土する河道跡があつて、道路の北側では、9世紀の掘立柱建物跡を中心とした生活の痕跡が見つかりました。つまり、北側のやや高い場所には昔の人々が生活をしており、南側には川あるいは湿地帯・沼地などが広がる景観であることが想像できます。

A区から見つかったASB01掘立柱建物跡は、廂が付いた大型建物跡で、遺跡内の中心となる建物と考えられます。また、北側には総柱建物跡があつて倉庫などの建物と想定されます。過去に調査を行った松川遺跡からは、同じ時期の掘立柱建物跡が見つかりしていることから、この地域の役所的な性格を持った集落が広がっていたことが考えられます。

D区から見つかった方形周溝群は、出土遺物が見つからないことから、その性格は不明ですが、岩手県内での報告事例があり、12世紀の墳墓や経塚と考えられます。隣接するDSD02溝跡から12世紀の遺物が集中して出土していることより、同じ時代に存在していた可能性があります。また、旧江刺郡の歴史的景観から見ると、遺跡の周辺に豊田館跡や伝益沢院跡などの12世紀の遺跡が所在します。今回、12世紀の遺物が多種多様に出土したことは、注目すべきことであり、おそらく、平泉の遺跡で見られるかわらけ・国産陶器・貿易陶磁が出土していることは、奥州藤原氏関連の遺跡が近くに存在していることが考えられます。

# 跡呂井遺跡群第 20 次発掘調査

調査地番 岩手県奥州市水沢区神明町 1 丁目 3 番 6  
調査面積 約 85 m<sup>2</sup>  
調査実施機関 奥州市教育委員会  
調査目的 個人住宅建築に係る事前調査

## 1. 跡呂井遺跡群の概略

跡呂井遺跡群は跡呂井遺跡、跡呂井中陣場遺跡、蛇塚遺跡、跡呂井館遺跡、常磐小学校遺跡の総称であり、胆沢扇状地の下位段丘である水沢段丘に位置しています。

今年度は奈良・平安時代の集落跡と中世の館跡と考えられている跡呂井館遺跡を調査しました。

跡呂井遺跡群としては昭和 54 年の第 1 次調査から昨年度の第 20 次調査まで 20 回調査を行っています。



跡呂井遺跡群第 20 次発掘調査区位置図

## 2. 跡呂井遺跡群第 20 次調査の概略

第 20 次調査区近辺は開発が進んでおり、調査区の周辺はほとんどが宅地でした。調査区の現況は畑でしたが、昭和 30 年頃に造成工事が行われており、地形が大きく改変されていました。

遺構は竪穴建物跡 1 棟、土坑跡 1 基、掘跡 1 条がみつかりました。



遺構配置図

## SI01 竪穴建物跡

調査区の中央で検出した竪穴建物跡で、今回の調査区内で最も古い遺構です。西側の3分の1程がSD01堀跡によって破壊されていますが、規模および形状は一辺6.3mの隅丸方形であると考えられます。

カマドは住居の北壁のほぼ中央に位置していると考えられますが、カマドの袖と煙道の大部分がSD01堀跡によって破壊されており、煙道の長さは不明です。

遺物は非ロクロの土師器がまとまって出土しており、SI01竪穴建物跡の時期は奈良時代であると考えられます。



SI01 竪穴建物跡床面検出状況（南から）



SI01 竪穴建物跡カマド燃焼面検出状況（南から）

## SK01 土坑跡

調査区の南側で検出した土坑跡でSI01竪穴建物跡より新しい遺構です。直径1.2m程の円形で、深さは60cm程度です。遺物は土師器片と須恵器片が出土しています。



SK01 土坑跡断面（南から）



SK01 土坑跡完掘状況（南から）

## SD01 堀跡

調査区の西から南にかけて検出した堀跡で、SI01竪穴建物跡より新しい遺構です。上層に現代のゴミを含む造成土と考えられる土が厚く堆積していました。

規模は調査区内での総長約14mで、調査区の中央付近で屈曲しており、調査区外の北東方向および南東方向に延びると考えられます。

調査区が狭く、堀跡の西岸を検出することができなかったため、幅は不明ですが少なくとも5m以上であると考えられます。

遺物は土師器片と須恵器片が少量出土しています。



SD01 堀跡検出状況（南から）

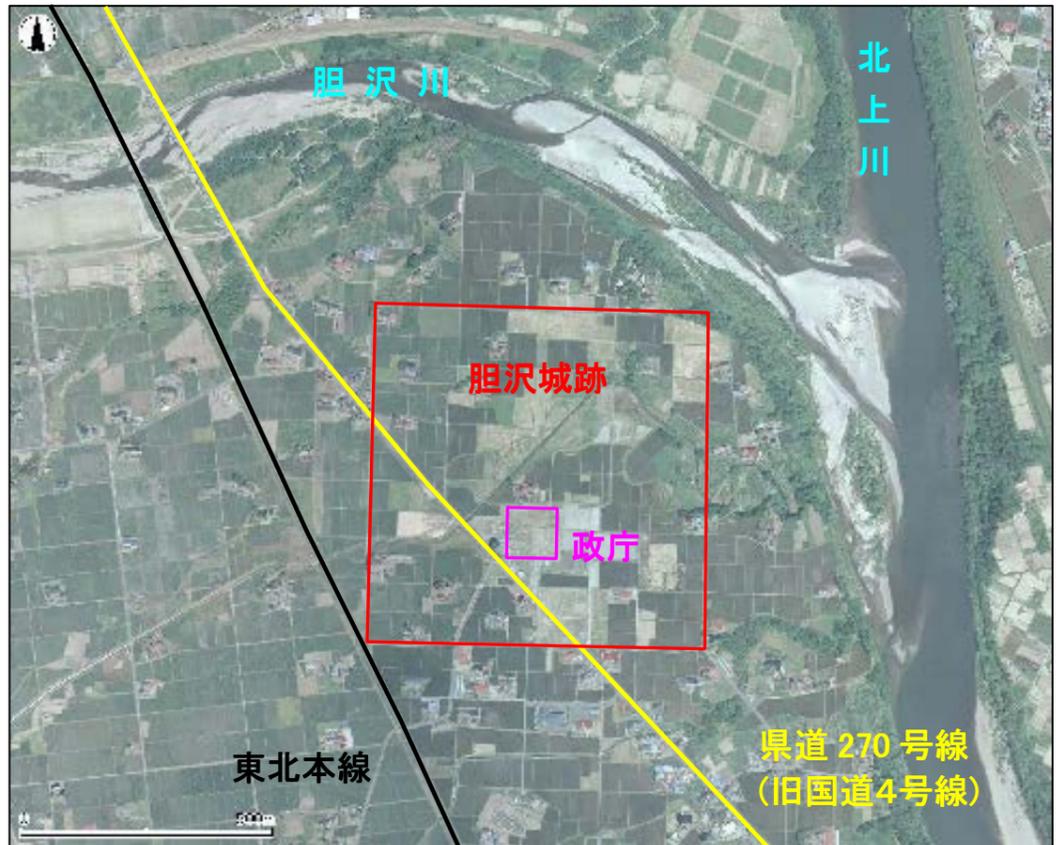
# 胆沢城跡

胆沢城は、延暦 21 (802) 年坂上田村麻呂により造営され、10 世紀後半まで陸奥国のうち岩手の内陸南部を治めた城柵です。北上川と胆沢川の合流点の西に位置しており、大正 11 (1922) 年 10 月 12 日に国の史跡に指定されました。

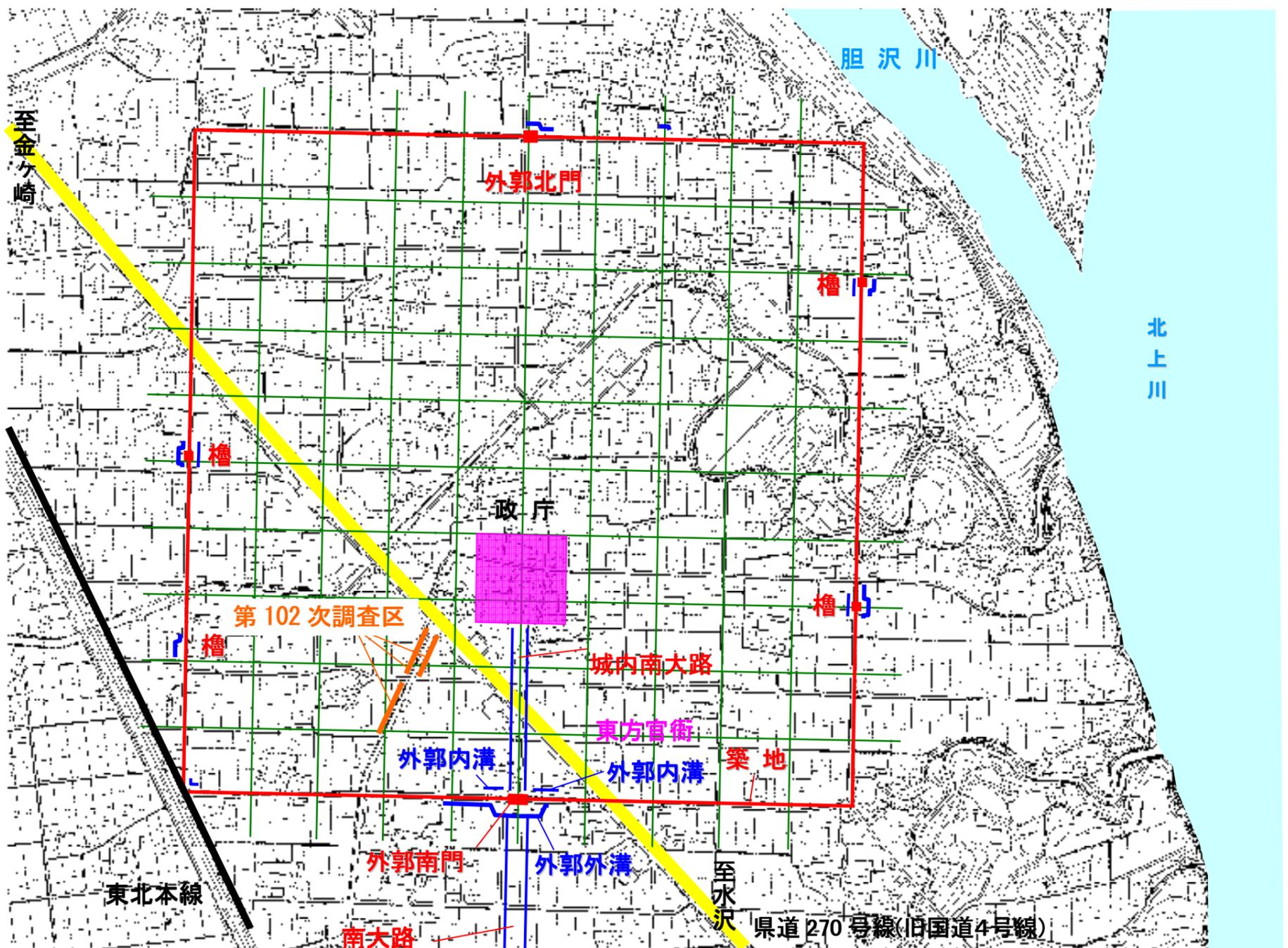
これまでの調査の結果から胆沢城は外郭と呼ばれる一辺が 670m ほどの築地やその内外にある溝により四辺が囲まれていることがわかっています。

また、門や櫓などは外郭をおよそ十分割した位置に存在し、これらの施設が存在する場所では基本的には外郭外溝が外側に張り出しています。

さらに、城内の中央やや南よりには一辺 90m ほどに区画された政庁と呼ばれる儀式空間があり、政庁の周辺には官衙と呼ばれる役所の実務を行う建物群があることがわかっています。



胆沢城跡位置図



平成 26 年度胆沢城跡発掘調査区位置図

# 胆沢城跡第 102 次発掘調査

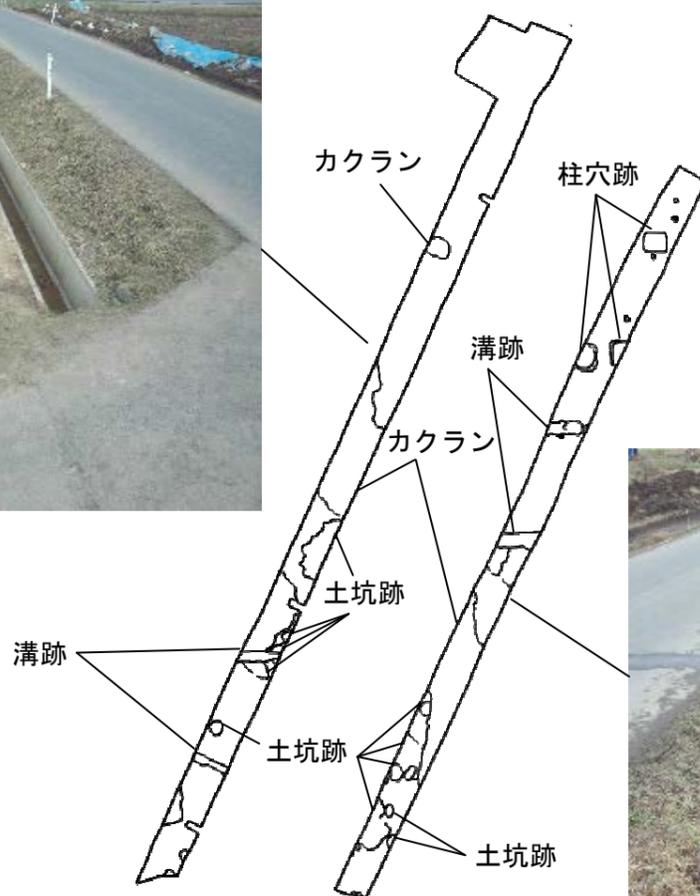
調査地番 岩手県奥州市水沢区佐倉河字四月 46-2、47-2、48-3、59-2  
調査面積 約 300 m<sup>2</sup>  
調査実施機関 奥州市教育委員会  
調査目的 市道拡幅工事に係る事前調査

胆沢城跡第 102 次発掘調査は、史跡内で市道拡幅工事が計画されたことから、事前に遺構の分布状況を確認するために、平成 26 年 11 月 6 日から同年 12 月 24 日までと平成 27 年 3 月 3 日から同年 3 月 31 日まで調査を実施し、遺構は竪穴状遺構、土坑跡、溝跡、柱穴跡などが見つかりました。

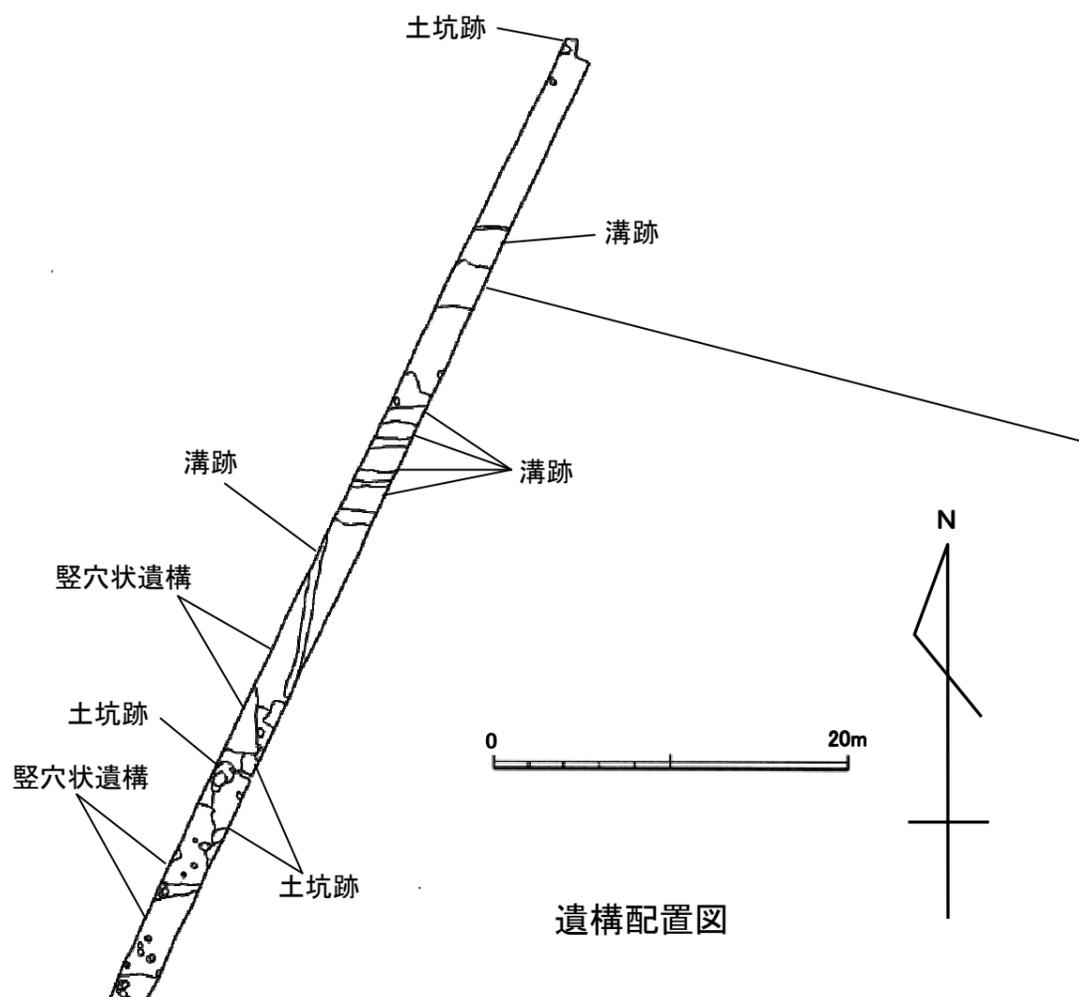
遺構の分布状況を確認するための調査であったため、遺構の掘り下げは行いませんでしたが、遺物は多く出土し、土師器や須恵器、瓦などがコンテナ（15 cm×35 cm×50 cm）で 15 箱出土しました。



2区全景（南から）



1区全景（南から）



3区全景（南から）

# 白鳥館遺跡第 13 次発掘調査成果概要

調査地番 奥州市前沢区字白鳥館・鶉ノ木田・浪洗地内  
調査面積 699 平方メートル  
調査期間 平成 26 年 4 月 17 日～平成 27 年 3 月 31 日  
調査機関 奥州市教育委員会 世界遺産登録推進室

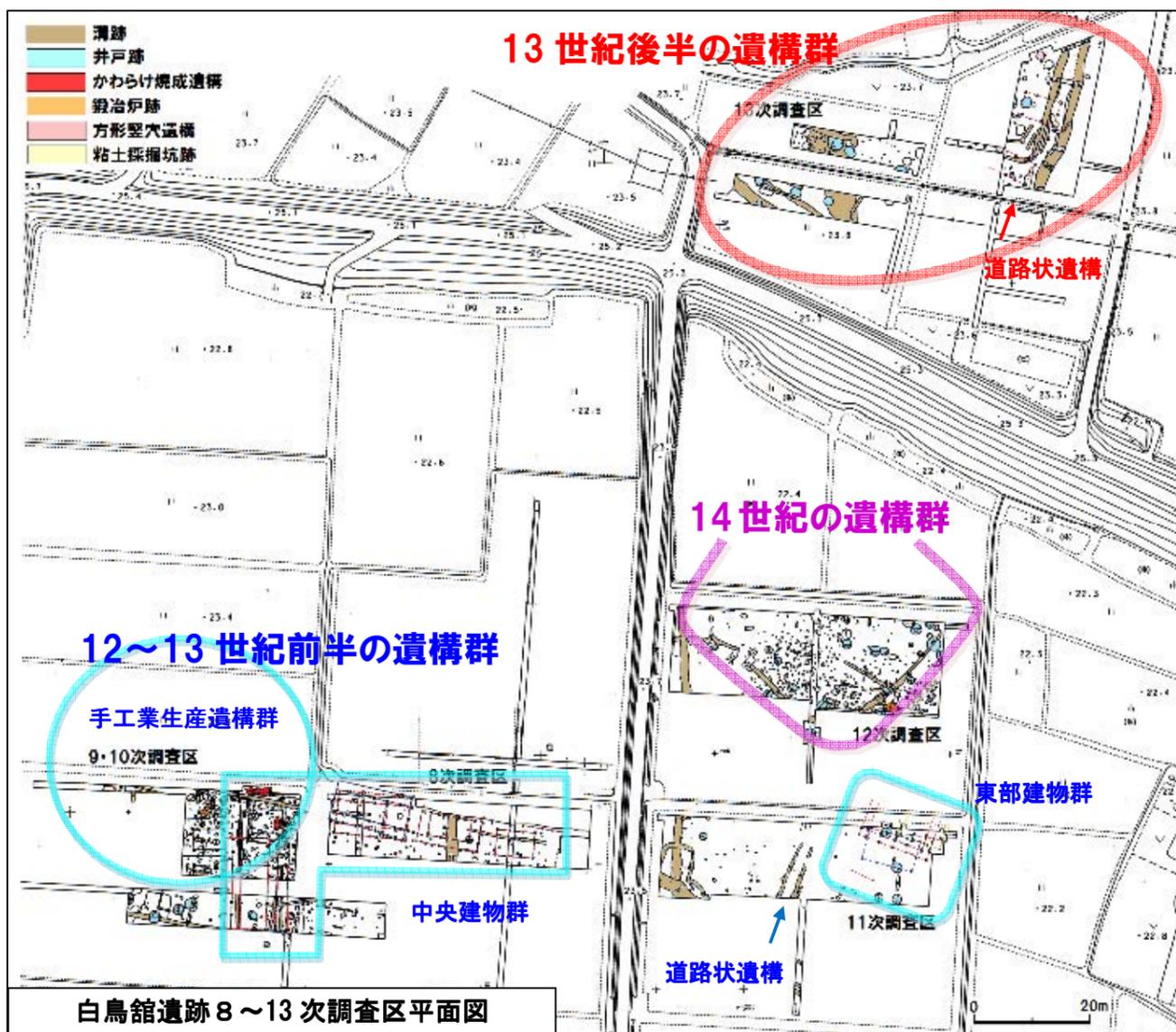
## 調査成果概要

第 13 次発掘調査は、低地の遺構群の北側の範囲を把握するため、堤防の北側から北上川までの間に広がる微高地を調査しました。

その結果、12～15 世紀と推定される道路状遺構と区画溝跡、井戸跡、掘立柱建物跡、土坑などの遺構が確認され、中国産陶磁器（青磁・白磁・磁竈窯産）、国産陶磁器（常滑、渥美、瀬戸）、かわらけ（ロクロ・手づくね）、銭（北宋銭、明銭）、釘などの鉄製品や、銅製品、砥石、羽口などの遺物が出土しました。

このうち東調査区で出土した道路状遺構は、方形に展開すると推定される 2 つの区画溝を側溝とするもので、調査区を南北に延び、北側の延長は北上川へと続くと考えられます。側溝には数度の掘り返しの跡がみられ、長期間にわたり利用されたことが窺えます。路面にはこぶし大の石が多数見られました。区画溝跡の内側には方形竪穴遺構や井戸跡、土坑などの遺構が多くみられ、遺構の中核部分と推定されます。方形竪穴遺構は、倉庫的な用途と推定されているもので、調査区北端で 1 基確認されました。区画溝と同じ方位であることから道路状遺構と同時期のものと推定されます。また、区画溝の内側から中国福建省磁竈窯産の盤が出土しています。これら道路状遺構と区画溝からなる一連の遺構群については、出土遺物から 13～14 世紀ごろの遺構と推定されます。また、東調査区では、道路状遺構より新しい 15 世紀以降の掘立柱建物が 2 棟確認されています。井戸跡は 12～13 世紀のものが調査区西部を中心に 9 基確認されました。

今回の調査によって、白鳥館遺跡の低地に広がる遺構群は、北上川の縁辺まで広がることが明らかとなりました。また、道路状遺構や区画溝などの遺構群は 13 世紀ごろのものと推定されることから、低地の遺構群は 12～14 世紀にわたって拠点を移動しながら継続して利用されたことが確認されました。加えて、鎌倉風の威信財として鎌倉時代の御家人層に受容された磁竈窯産盤が出土したことから、13 世紀ごろの白鳥館遺跡には鎌倉御家人などの有力者が関与していたことが判明しました。さらに、北上川と旧白鳥川の合流点に向かうと見られる道路状遺構と、倉庫などの用途が推定されている竪穴建物遺構が確認されたことは、白鳥館遺跡が川湊である可能性をより高める結果となりました。



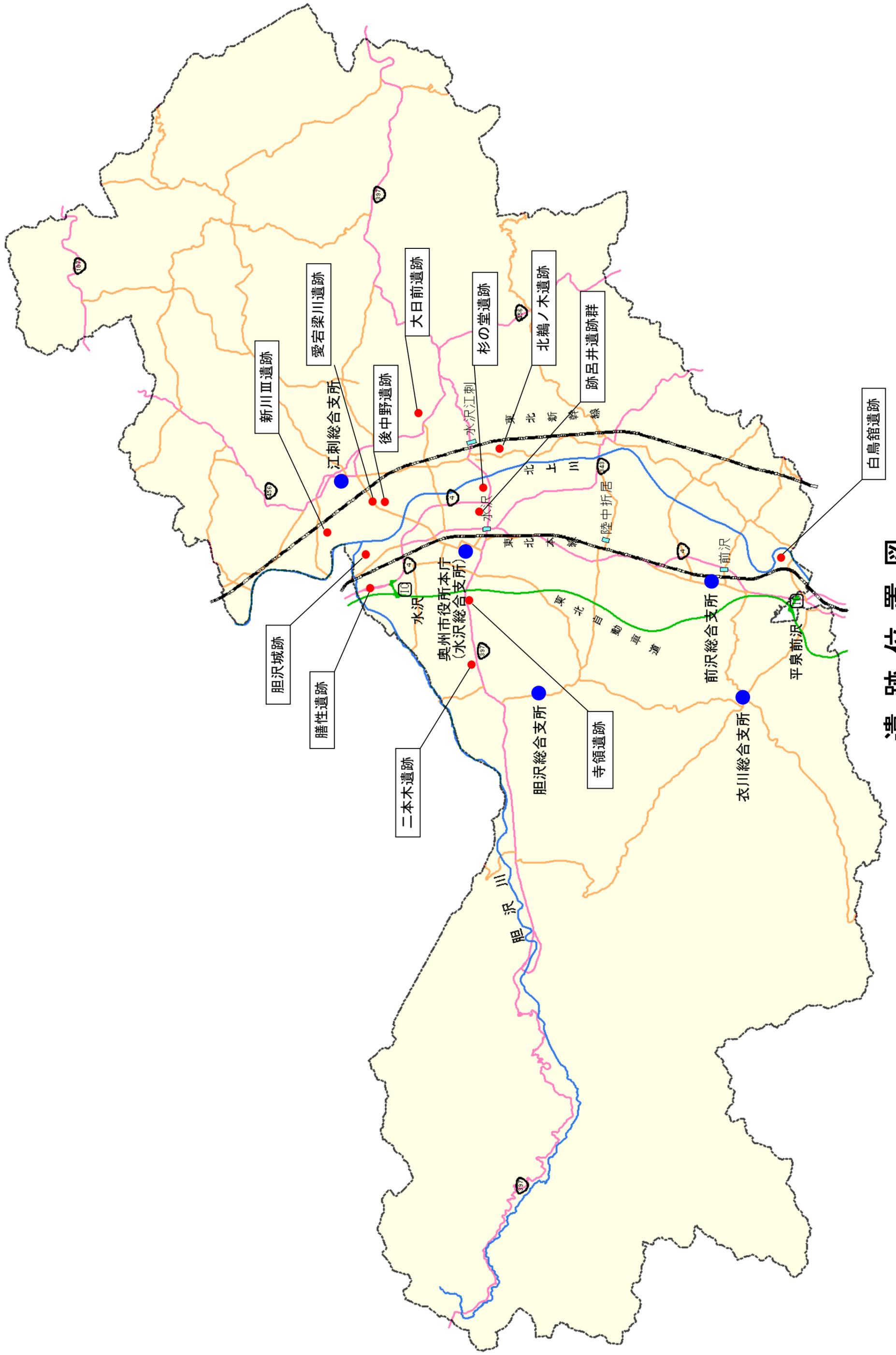
調査区全景（南から）



道路状遺構（南から）



中国磁竈窯産陶器



遺跡位置図

# 発掘された奥州市 展 2015

— 胆沢城前夜と最新の発掘成果 —

主催：奥州市教育委員会（主管：歴史遺産課）

[会場・会期]

奥州市牛の博物館	平成27年6月5日～6月21日
奥州市埋蔵文化財調査センター	平成27年6月26日～7月6日
えさし郷土文化館	平成27年7月10日～7月22日
胆沢郷土資料館	平成27年7月24日～8月23日